

第3章 パーチカル式ファイリングシステムの概要と歴史背景

第2章においても、米国で生まれたパーチカル式ファイリングシステムについては、日本の外務省での大正末期～昭和初期における導入の試み等に関連してそれなりの説明をしています。が、“パーチカル式ファイリングシステムとは何ぞや”という説明までは行っていません。

本章では、パーチカル式ファイリングシステムが米国において誕生した背景や、筆者の眼で見ても当時画期的だったであろうと思われるその仕組みについて説明を行います。また逆に宿命論的に持たざるを得なかった欠点についても触れ、更には現代の高度情報化社会の中でこのシステムの価値と役割がどのように変化してきているかについても述べてみたいと思います。

3.1 パーチカル式ファイリングシステムの呼称整理と付随する用具等の例示

3.1.1 システム呼称

このシステムが米国において短期間に目ざましく普及する中で、米国内では本来“文書をまとめるシステム”、“文書の整理をする”といった汎用的で広義の意味であった「Filing」や「Filing System」の語を、専らパーチカル式フォルダを使用するファイリングシステムだけを指すものとして迷うことなく使用しています。

これが米国内でのみ通用するものだということに米国人のだれもが気づいていないかもしれません。

本論では、米国人のみにとっての意味で「ファイリングシステム」は使用せず、これを「パーチカル式ファイリングシステム」の呼称に代えて使用しています。また出現しても少数例にとどまる「米国式ファイリングシステム」も米国民にとってのファイリングシステムの代替呼称とすることにしています。

システム呼称の用法は以上とし、これ以降の記述でも変えないこととします。

3.1.2 基本用具（括束用具、ガイドサイン用ガイド用紙、専用キャビネット）

このシステムが普及されてゆく初期に、パーチカル式ファイリングシステムに使用された用具や什器等を具体的に示すことはできませんが、縦落とし込み型の2つ折りフォルダと、このフォルダ格納のために専用のキャビネットが制作・販売されていたことだけは間違いないところです。むしろ新型キャビネットの需要を当て込んでパーチカル式のフォルダとシステムが開発された可能性さえあります。

日本の現状においても同じようなことが起こっていますが、パーチカル式ファイリングシステムの普及には、事務機器メーカーの影が常に付きまといまいます。

米国においてこれらメーカーが、ファイリングの専門教育を行う専門学校創設の嚆矢となったという事実は、普及初期におけるこのシステムと事務機器メーカーとの表裏一体の密接な関係を象徴しています。

確かにこのシステムの裏に利害関係のあるメーカーや販売業者がいたにしても、これまでになかったシステムの普及初期の段階で、システム自体ユーザーにとって有効であると信じ、身銭を切っても教育を行おうとする心意気を感じます。

この点で、米国の事務機器メーカーの例は評価をされるものですが、一方、現在の日本の事務機器メーカー等はどうでしょう？

現在の日本においても、事務機器メーカーや販売業者が、自社の高額なキャビネットシステムを販売したいがため、パーチカル式ファイリングシステムを財政規模の小さな市町村に推奨し、コンサルタントの無償派遣まで行うケースがまま見受けられます。

その意味で、米国と同様にシステムとメーカー等との間には密接な関係があるようです。

しかも、より高額の上を上げることを優先し、客先の現実の文書管理状態や、システムの構築や維持のための人的リソースにお構いなしに、盲目的に「パーチカル式ファイリングは正しいもの」と決めつけて推奨する傾向がまま見受けられます。

売らんがために無償若しくは無償に近い金額でコンサルタントを派遣するケースもあり、特に財政規模の小さな市町村では、メーカーや販売業者の真意を見定めることが大事となります。

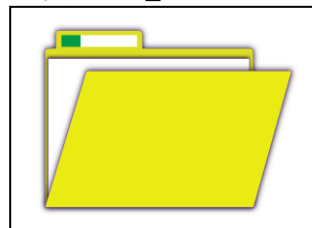
以下に用具、什器等を図で例示し、その組み合わせ運用法の例についても掲示します。

(1) バッチカルフォルダ（個別フォルダ）とフォルダタイトル

図表 C3.1_01

個別フォルダは、実際に文書が格納される最小単位の括束用具です。（図表 C3.1_01）

タイトル部には、色シールでの区分目印や、文字による文書表題、発生、廃棄年度等の必須事項を記載する必要が有ります。



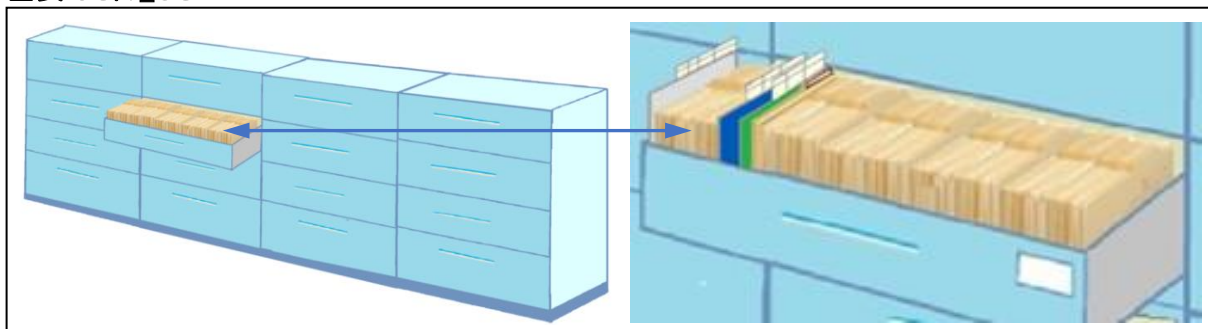
(2) 階層ガイドとガイドタイトルの例

図表 C3.1_02

第1階層	CAB.&段	第2階層	第3階層/第1ガイド	CAB.&段	1~3階層	第4階層/第2ガイド	CAB.&段	1~4階層	第5階層/第3ガイド
L:米州 営業部	L5-2	O3営業 企画・調査	O2 市場調査	L5-2	L O3 O2	O2 調査結果報告書	L5-2	L O3 O2 O2	O2 陶磁器

(3) バッチカル式ファイリング専用キャビネット例

図表 C3.1_03



(4) 組み合わせ運用例

図表 C3.1_04

第1階層	CAB.&段	第1ガイド	CAB.&段	1~2階層	第2ガイド	CAB.&段	1~3階層	第3ガイド
L:米州 営業部	S1-2 仕掛中	O3 営業企画・調査	S1-2 仕掛中	L O3	O2 調査結果報告書	S1-2 仕掛中	L O3 O2	O2 陶磁器

O3 CANADA
O2 USA西部・南部
O1 USA東部・中部

3.1.3 文書分類表の例

図表 C3.1_05

文書分類の階層						
第1階層	第2階層	第3階層	第4階層	第5階層	第6階層	
文書庫内ブロック標識	キャビネット列標識	段の標識 第1ガイド	第2ガイド	第3ガイド	個別フォルダ	
L 米州営業部	00 処務		(省略)	(省略)	(省略)	(省略)
	01 監査		(省略)	(省略)	(省略)	(省略)
	02 通信記録		(省略)	(省略)	(省略)	(省略)
	03 営業企画・調査	01 企画書		01 新商品企画	01 新商品企画	(省略)
				02 見本市出展	02 見本市出展	(省略)
				03 単独展示会	03 単独展示会	(省略)
		02 市場調査	01 調査委託		01 委託先調査	(省略)
					02 委託契約書	(省略)
					03 その他	(省略)
			02 調査結果報告書	01 陶磁器	01	2018年
					02	2019年
					03	2020年
	02 絹糸・絹織物	(省略)				
	03 農産品	(省略)				
	04 機械部品	(省略)				
	05 製造機械	(省略)				
	06 その他	(省略)				
	04 販売店管理	01 契約		01 弁護士確認	01 弁護士確認	(省略)
				02 契約書	02 契約書	(省略)
		02 経営状態調査		01 決算書	01 決算書	(省略)
				02 保持資格等	02 保持資格等	(省略)
	05 競合他社現況調査		(省略)	(省略)	(省略)	(省略)
	06 販売計画		(省略)	(省略)	(省略)	(省略)
	07 販売実績		(省略)	(省略)	(省略)	(省略)
(08以下省略)		(省略)	(省略)	(省略)	(省略)	

米国での普及初期には文書分類表が用いられたのかについては確証が無く不明ですが、このシステムの最大の持ち味である「ガイドサイン型検索」のためのガイドサインを配置するには、複数の階層化はどうしても必要である以上、階層化の前提となる文書分類が存在していなかった訳はないと筆者は考えます。

よほど単純で、個人的な文書ファイルやスモールオフィスレベルの文書管理なら、対象数量や種類が少なく、極端に言えば文書名称や関係先名の先頭音によってガイドサインを構成すれば階層化は必要ないかもしれませんが、米国の産業社会がこのシステムに求めたものは、このようなレベルで満足するものではなかったでしょう。

このシステムでは、「アーカイブと文書管理」(勉誠出版、2016年、27頁)によると、「それ〔1950年代〕以前のファイリングシステムでは必ずしも目録などの成果物は作成されず、部分的に索引が作られる程度だった。」(□内は文脈からの筆者加筆)とあります。検索、索引に必須の文書分類表はどうかと一時筆者自身が自ら書いている内容に不安を持ちましたが、その後よく考えてみれば、同氏は1950年代までは文書の検索を行う際には索引簿や目録が利用されることはなかったと言っているだけであって、文書分類表そのものが無かったと言って

いる訳ではないことに気づきました。

検索の際に利用されなくても、バックヤードでは文書分類表が準備されていて、この文書分類表に基づくガイドサイン配列が検索台帳や索引の代わりに果たしていたということです。

この後に触れる、欧州由来のファイリングシステムでの索引方式が、米国人にとっては鼻持ちならず、まどろっこしく感じられたがゆえに、バーチカル式ファイリングシステムが登場した経緯を考えれば、1950年代前後までの間、坂口氏が言われるように索引簿が利用されることは無かったとの話は、確かに有り得る話であると思いますし、この1950年代と言う時代が、IBMをはじめコンピュータメーカーが汎用コンピュータを開発し、民間等で利用され始めた時代であることも、その後の何ごとかを象徴しているように思います。

なお本論では、文書分類法自体には深くは触れません。

分類における各階層に与えられる分類名称付与の仕方によっては誤誘導や、分岐における迷いが生じやすくなる等、総体としての迅速性や使い勝手を左右するなどの点で、重要な要素ではあることは認識していますが、これはバーチカル式と簿冊式という2つのファイリングシステムに共通する部分であるために、これを比較し検討することが本論の目的に合致しないことと、分類法は余りに奥が深く、下手に手を出すと本論の趣旨を離れて論述量が増え、読者にとって本論の全体的な理解を妨げる結果になりかねないからです。

このシステムの初期段階での分類がどうであったかはさて置いて、ここでは文書使用者の属すセクション単位で、発生する文書の種類と名称を最下層とし、そこから上位階層を構築してゆく「積み上げ方式」と呼ばれる方法と、特定の管理者若しくは管理者グループの手で、組織全体の業務分析と、発生文書種類と総量の調査と分析を行って、全組織全セクションが共通で使用する分類を作成するという「割付方式」と呼ばれる方法があり、現在、少なくとも日本においては「積み上げ方式」をとりながら、一方で全セクションが共有して持たざるをえない管理的文書に限っては「割付方式」が採用されるという「積み上げ方式」と「割付方式」の良いとこ取りの「複合方式」が採用されることが多いことを指摘するとどめたいと思います。

このような分類法の選択に関しては、おそらく米国でも上に述べたと同様の経緯を辿ったのではないかと筆者は推測します。

3.1.4 ファイル基準表

「ファイル基準表」とは、3.1.3 で触れた積み上げ方式、割付方式に応じ、セクション単位若しくは組織全体の当年度発生文書の名称や、保存年限等（機密性や情報公開の可否等の属性情報を含める場合もある）を当年度が始まる日付前の時点で表にまとめたものを言います。

文書は、官公庁、民間を問わず、毎年度同一種類、同一名で呼ばれて支障ない文書が発生します。この傾向は官公庁においてより強いものとなります。

上に述べた組織内で同種文書が繰り返し発生するという性格を利用し、前年度のファイル基準表を当年度にも利用し、過去の基準表に存在しない文書は新規に登録するなど作業を行えば、作成する際の労力も最小限で済みます。その運用効果は大きく、同一種文書に異なる名称を与えてしまう間違いや、文書をまとめる都度に保存年限やその他の属性を調査する手間が解消されます。

ファイリングシステムの崩壊は、文書（バーチカル個別フォルダ）ごとの保存年限が明記されていないことによって定期的で適正な廃棄が滞ることが原因となるケースが多く、その意味では、ファイリングシステムにおいて重要で、基準を示す表であるがゆえに「ファイル基準表」と名付けられています。しかしこの「ファイル基準表」の名称がいつから使用され始めたのか、発祥が米国なのか日本なのかなど調査しましたが良くわかりません。

バーチカル式ファイリングシステムが米国に受容された原因の1つが、標準化にあり、教育や知的水準、言語理解のレベルが異なる組織内で、誰もが参加できる仕組みとすることに在る以上、名称はともかく米国においても同種、類似の基準表が早い時期から使用されていてもおかしくはないと思いますが、これは根拠の無い推測です。

この項でファイル基準表について取り上げたのは、普及初期に存在したかどうかに関わらず、また現在の米国において用いられているかどうかに関わらず、日本におけるバーチカル式ファイリングに必須のものとされていることが理由です。

本論執筆の主たる目的は、今後の日本の官公庁で文書管理が向かう経路の中での現状に警鐘を鳴らし、また今後どのように自らを変化させ、運用を革新していかなければならないかを示すことにありますから、米国での普及初期に概念が存在したかどうかの根拠を示し、当時の姿を再現することは重要ではあるのですが、歴史的事実関係が容易に見いだせない以上、現代における日本でのファイル基準表を取り上げ説明することこそがさらに重要です。

3.1.5 パーソナルコンピュータのオペレーティングシステム内のファイリング用語

20 世紀末から米国が発信源となって急速に進化して行くパーソナルコンピュータ（以下パソコンとします）の世界では、アップル社やマイクロソフト社のオペレーティングシステム（以下 OS とします）内で使われ、今や全世界のパソコン利用人口の全てにとって日常的である「フォルダ」の概念や、階層化されたフォルダ名称を追うタイプの検索方式には、疑いなく米国固有のバッチカル式ファイリングシステムが元もと持っている仕組みや特性が反映されています。

バッチカルフォルダの形状は、パソコンの OS にコントロールされて画面に表示されるフォルダアイコンの形状に他なりません。

また下の図表 C3.1_06 に示したように、パソコン画面に表示される（Windows）のエクスプローラの樹状階層は、紙のバッチカル式ファイリングにおけるガイドや個別フォルダの階層を模していることは明らかです。

このことは、文書情報や情報検索、分類などの紙をベースとした情報処理の延長線上にコンピュータシステムの仕組みが構築されていることを示しているとともに、後に触れるように、紙文書の情報管理が丸ごとコンピュータシステムに代替される運命に在ることを予知するものでもあります。

筆者はパソコン画面で個別のフォルダアイコンと、エクスプローラ上で表現される樹状階層を見ながら、これほどまでにバッチカル式ファイリングシステムは米国人の骨の髄まで染みこんでいるのだと、一種の感動を覚えたことが幾度かあります。

図表 C3.1_06 エクスプローラによるフォルダと階層の樹状表示

